

# メディアと能楽

—SPレコードと朝日新聞社主催能を中心に—

飯塚 恵理人

## 一 はじめに

明治から大正期にかけての能の興行は、数寄者・旦那衆が共同して資金を出して年に何回かの能を行うという形が主流であり、基本的には「年会費」「数人分の升席」での販売であった。これは、能を催す側にとっては、先に会費を貰っているの、その範囲で催しを行う上では、赤字が出ることはないといった利点がある。しかしながら、だんだんと数寄者や有力な商家の財力が衰えると、このような年会費・数人分一括の能のチケットの販売に限界が出てくる。無論それ以前から「臨時会員券」の形で一人用のチケットはあった。しかしながら、それを買う人々を興行の主な観客とは考えていなかった。

昭和初期には、公務員・会社員など高い教育レベルを持ち、会社のサークルなどで能や謡曲に触れる人が増えてきた。そして、それらの人々向けに、「一回のみ」「一人で行ける」能の興行が行われるようになる。このような能の興

行は、従来の「升席」の能楽堂では対応できなかった。能楽堂は昭和初期に次々に椅子席に改築されるが、「一人向け」の能を最初に「行うのは新聞社である。そして、新しい観客の獲得に大きな働きを果たしたのが、新聞・ラジオ・SPレコードというメディアである。本稿では昭和初期の能楽の「大衆化」をメディアとの関わりから考えて行きたい。なお、本稿に引用した「能楽画報」「朝日新聞」の記事は、原則旧漢字を新漢字に改め、句読点も飯塚が私に附した。

## 二 SPレコードと「謡い方」の統一

大正十四年四月に観世流宗家観世元滋の独吟の「熊野」が発売された。それ以前から謡曲のレコードは存在したが、これは一曲を完備した「番謡」のレコードである点に特徴があった。SPレコードで九枚組である。「能楽画報」大正十四年三月号<sup>(1)</sup>の裏表紙の広告によれば、発売元は「観世流謡曲音譜会」で、このレコードが発売第一作である。大阪は大阪市東区松屋町農人橋角、東京は東京市牛込区市ヶ谷仲之町四六に事務所を持ち、「米原以西は大阪へ、以东は東京へ御申込を願ひます」と書かれているように都市部のみならず全国からの申し込みを意図していた。この番謡レコードの広告を引用すると、

観世元滋先生が全謡曲界を通じての名声は今更贅言を費すまでもありますまい。斯界多年の宿望であつた宗家吹込のレコードも遂に今春ニットーレコードによつて実現しレコードとして殆ど批難の余地なしと思ふゝまでの優れたる出来栄なるに力を得ましたので、更に請ふて最も典雅を以て聞ゆる熊野全曲の吹込を了り劈頭これを公にするを得たのであります。引続き曲の優れたるものゝみを選び逐次発表する事と致しました。此企てたるや蓄音機音譜として実に空前の壮挙で

あるのみならず、恐らく謡曲界の驚異たる事と信じます。切に諸彦の御後援に俟つ次第であります。

となる。観世元滋が人気曲である《熊野》を吹き込んだという形だが、《熊野》は、《羽衣》とならび、謡曲では最初に稽古する初心者向けの曲の一つである。同記事には注釈として、「本レコードは一組毎に優雅で堅牢なサククに収めましたから永遠に御所蔵が出来ます。尚別に正本版元特製の稽古本を附し巻末に『斎藤香村氏執筆の熊野解説』を掲げ聴者に便しました。」とある。特に注目されるのは、「稽古本」を附録としている点で、単に「聴く」のみではなく、蓄音機を「聴く」人が自分の稽古の参考にすることを意図しているように読めるのである。

このような「稽古」を意識した宣伝の意図は、回を追うごとに鮮明となる。《熊野》《田村》が発売されていた「能楽画報」大正十四年七月号の裏表紙の解説には、「シテワキ地謡悉く一番の首尾を通じて宗家が独吟せられ従来のレコードの興味本意なりしものと選を異にして居り本音譜に依りて観世流は遺憾なく統一さるゝ事と信じます」と書かれている。この広告には、宗家の謡がレコードによって全国に聴かれることによって、観世流の謡い方が統一されるであろうと述べている。これははたしてその通りになって行くのだが、観世元滋の独吟のレコードが、発売される時点でそのような意図を持っていたことは注意すべきだろう。

「能楽画報」大正十五年一月号の裏表紙の「第五回《高砂》」の広告には、「本音譜は首尾を通じて元滋先生の独吟でありますから、御所蔵の方は御宅に在つて日々宗家先生に就いて教へを受けらるゝと同じ訳で一番を通じての節扱ひも仮名の扱ひも総てがこれに依つて明かになり、観世流の秘曲は残らず御会得が出来ることゝ信じます。」とあるから、明らかに「元滋」の謡い方を基準とした稽古を意図している。このレコードにも「尚ほレコードの切れ目及吹込の際の所要時間を記したる正本版元特製の袖珍謡本を附してあります。」とある。区切りが謡本に記してあるのだから、聴く人は、自分の稽古したい部分の盤のみをかければよい。当時としては大変便利な教材であったと考えられる。

SPレコードのない当時、「観世流」を習っている人であっても、直接家元の出る舞台を見ない地方の人は「家元」の声を聞くことはなかった。自分の師匠の謡を真似して稽古していたはずである。直弟子・孫弟子と遠くなるにしたがって、節扱いなどは当然異なっていたことが想像される。昭和初期から戦前にかけて、SPレコードを耳にした人が、自分の師匠のみならず全国的に「家元」「名人」のレコードをもとに稽古したことは充分予想される。このようなSPレコードの普及が、「謡曲の本文」のみならず流儀の「謡い方」の「全国統一」の大きな契機となったことが予想される。

### 三 能舞台から「講堂」「劇場」への進出―朝日講堂での能―

大正時代まで、能は能楽堂以外で演奏されることはなかった。それは「上流社会」の芸として、庶民の芸である「歌舞伎」よりも「上等」なものとして区別したいという能楽師側の事情もあった。観世元滋<sup>④</sup>は、大正十一年七月の山形での演能を、用意された会場が「劇場」であったことを理由に中止して帰京している。これは当時の「能楽協会」の会則と「慣例」によるものだった。しかしながら、昭和期に入ると従来の後援者であった華族や商家が代替わりし、経済力も落ちてゆくといった事情があり、従来のシステムが成り立たなくなってきた。このようなときに、新聞社が自社の「講堂」で「能」を催すという「企画」を行なった。これは「新聞」というメディアが、能を「興行」として行なったという面で画期的だった。この記録を朝日新聞でたどると以下のようなことになる。

この企画が最初に発表されたのは「東京朝日新聞」昭和二年五月二十一日の記事である。見出しは「各宗家を一同に 能楽の画期的公演 狂言、奏楽の家元も網羅し 能舞台から一躍進」というもので、

能楽および謡に対する社会一般の好尚と興味は近年益盛んになる傾向であるが、能楽はその公開演技方法が地方においてやむを得ざる場合に公会堂等において公演するは例外として、能舞台以外には全く出演せざる慣例となつてゐた。それがため日本の国民芸術の粹といはれるこの舞台芸術も一部比較的少数の人々の間にのみ限られてゐるのも事実である。

この現状では能楽を公衆共楽のものとならしむる事は事実上至難なものであつたが、今回東京朝日新聞社では、新築大講堂の完成によりその舞台を能楽に提供することにより、多年能楽界懸案の解決を計らんと計画し、観世、宝生、喜多、金春の宗家並に狂言、奏楽の各家元および権威者等に対し共同出演を希望したところ、機運も既に熟してゐた折柄といづれもきん然として賛同した。よつて十九日正午より帝国ホテルに喜多、桜間、宝生の三家元諸氏（観世元滋氏は旅行中のため欠席）宝生新、幸悟朗川崎利吉山本東次郎、藤江又喜のワキ、奏楽、狂言の各家元および権威諸氏と本社側代表者が会合し、打合せ会を開いた、その結果前記諸氏総出演で米月十八、十九日午後一時より二日間わたり、本社講堂において公演することになった。これは能楽が能舞台より躍進して公衆の前に始めて出るもので、能楽界の画時代的事といふことが出来る。

尚番組その他は確定次第追つて発表することになつてゐる。

というものである。この企画は「劇場」ではなく「新築大講堂」で行なうものとされており、実質的に劇場建築で行なうものと變わりないとしても、能楽師のプライドから受け入れられやすいものだった。能楽師がそのように述べるのみでなく、従来の保護者である華族も賛成しているという形をとった。これは同記事に、

能楽民衆化の慶賀すべき首途 近來の快心事である 能楽協会々長 松平頼寿伯談

貴社の如き權威ある新聞が今回のやうな催しを主催することは同界のためにまことに慶賀すべきことです、これにより能楽の民衆化あるひは民衆の能楽化の第一歩の開かれる事と思ひ、能楽会会長として近來の快心事と思ひます。

とあることによる。また「乗り出す四宗家」という見出しで、観世元滋・桜間金太郎・宝生重英・喜多實の顔写真が載る。そして、出演者がこの企画をとっても歓迎しているという記事を載せた。宝生重英・宝生新・喜多實の談話で、これを引用すると、

全力を挙げ舞台に 計画を心から感謝します

宝生重英談

この度の御社のお骨折に心から感謝いたしてをります、我々各流派が能舞台に集りますことは度々であるのですが、今度のやうに新聞社が中心になつていたゞき一般の舞台に出ることは全くこれが最初であります、私共は今度は一門全力をあげて舞台に立つ覚悟ですが幸ひ日本固有のこの芸術である能樂が更に一般に普及され、盛んになることを祈り居ります。

八百年來の新計画 能樂を救済する企て

ワキ 宝生新氏談

今回の如く四派がそろつて民衆に接するといふことは能狂言の歴史八百年來はじめてのことです、從來も四派同じ舞台をつとめたことはありますが、それは常に限られた種類の見物の前でありました、元來能狂言は古い形式を今日にまで伝へてゐて、その形式を改めたりすることは絶対に許されない芸術であります、で見物も相當の予備知識がなくては能狂言の舞台はちよつとわかりかねる、ところが能樂界の人々は世間との接觸をなるべく避けてゐるので民衆とは益々縁遠いものになつてゐる、これは悲しむべきことです、御社の計画はかうした支障を除去して能樂を普及させる第一声であるとは私は信じます、能狂言の本質にわたる改革などは伝統を重んずる能狂言として許されないことですが、その発表乃至は研究の方法などはいくら變へても差支ありません。御社の計画は能樂を救ふものです、

能樂を救ふ途

シテ 喜多實氏談

御社の計画によつて私の平素の持論が漸く実現の初光を望み見たやうな氣がします。現在の如き状態では能狂言と世間

とは全く没交渉です。世間は能楽の盛衰には全然無関心で、能楽界の人々も世間を冷眼視してゐる、全く惜しむべきことです。志賀直哉氏が最近能狂言を観て非常に感激して「世間はもつと能楽に注目しなくてはならない」と何かに書いてゐられたやうですが、志賀氏などはもつと早く能狂言を知つてゐるはずの人です、それがかうした歎声をもらされるといふことは能が世間と没交渉であることを明白に物語つてゐます。御社の計画は能楽を救ふものであるといつても差支ありません。

喜多實の発言では、志賀直哉を例として引用する点に特色がある。志賀直哉のような「著名」な「作家」が能を知らない。喜多實としては、志賀直哉の作品を愛好するような、知識人階級への能の普及を考えていたと言つてよいだろう。観世元滋が旅行中を理由に新聞社との話し合いを欠席し、談話も載せないのは、前述の劇場演能拒否事件があつたためと考えて良いだろう。

「東京朝日新聞」昭和二年六月一日には「まかり出で候 能楽宗家の面々 きのふ日比谷のコートでテニス大試合の事」という見出しで、喜多實・後藤得三や囃子方の人々のテニスの試合について述べる。喜多實がテニスをしている写真入りで載せるが、これは朝日講堂での能の前に能楽師への興味を持たせる意図的な宣伝であらうと思われる。

「東京朝日新聞」昭和二年六月十日には、「本社演能大会の番組と期日決定す いよいよ十八、十九の両日 能楽界空前の盛事」の見出しで十八日・十九日の催しのプログラムが載る。記事から演目とシテのみを挙げると、第一日目（十八日、土曜日）は 一、半能《高砂》桜間道雄 二、《七騎落》宝生重英 三、《棒しばり》山本東次郎 四、《葵上》喜多實。二日目（十九日、日曜日）は 一、《羽衣 替ノ型》桜間金太郎 二、《六地藏》藤江又喜 三、《望月》観世元滋となる。現在と異なり、僅か一週間前程度の発表である。この記事には「この一流ぞろひ」と三段にわたつて能楽師の顔写真が載る。上段右から川崎利吉、一噌又六郎、山本東次郎、中段右から宝生新、金春林太郎、

桜間道雄、高安鬼三、下段右から、藤江又喜、北村一郎、幸悟朗の十名である。シテ方は桜間道雄一名。これは、道雄以外のシテを勤める人の顔写真が皆「東京朝日新聞」五月二十一日（前掲）に載っているためであらう。ワキは宝生新一人、笛が一噌又六郎の一名、小鼓が北村一郎、幸悟朗の二名、大鼓が高安鬼三と川崎利吉の二名、太鼓が金春林太郎の一名、狂言が山本東次郎と藤江又喜の二名となる。各役ともバランスよく第一人者の顔写真を載せたといえる。

番組と共に、この催しの意義について述べるが、これは

本社が能楽界の画期的計画として各流派家並に代表的人物を網羅して朝日講堂で演能大会を開催する事に決した事は既報の如くであるが、いよく来る十八、十九両日（午後一時開演）左記番組をもつて一般の鑑賞に供する事となつた。その内「高砂」と「羽衣」は能楽中のもつとも典型的な曲で先帝御大典の折にも御前能中に選ばれたものでその他四曲いづれも世に知られた物語りで崇敬、優美、純真、せい惨、壮快の各特質を備えた傑作として、薦められて居るものである、これが出演者として現在の能楽界における権威者を一堂に集め得た事は近來能楽堂においてゞも見られない偉観で、先に本社の計画発表と同時に九州、北海道のあたりからまで遙々参観申込がある程である。「高砂」の桜間道雄氏は今春流の新進、「七騎落」の宝生重英氏は宝生流の家元、「葵上」の喜多實氏は喜多流家元の嗣子、「羽衣」の桜間金太郎氏は今春流の大立者、「望月」の観世元滋氏は観世流の家元である。更に宝生新氏はワキ方の第一人者、はやし方中大鼓の高安鬼三、川崎利吉、小鼓の幸悟朗、北村一郎、太鼓の今春林太郎、笛の一噌又六郎、狂言の山本東次郎、藤江又喜諸氏はそれ／＼その流における家元又は代表権威者であることは世人の知る通りである。尚本社が右の如き番組作製をなしたのは、いまだ能の何たるかを知らざる人々に理解の機会を与へたい微意からで、当日はそれ等の人々のため観能上の理解を易からしむるため、各番組の詳細な解説と見どころ書を配布するはずである。【観覧入場券は一等三円、二等二円、取扱所は本社受

付、わんや本支店、プレーガイド、出演各流宗家で、入場券には座席番号を付してある。】

というものである。能を「初めて観る」人のために様々な点で工夫を凝らしたことを述べるが、それを

・演目が「先帝御大典の折にも御前能中に選まれた」傑作である。

・出演者として現在の能楽界における権威者を一堂に集め得た

・各番毎の詳細な解説と見どころ書を配布する

という具体的な形で述べている。

この記事に続いて能評家の坂元雪鳥の談話が載る。

きびくした新しい機運 総べてが新レコード 坂元雪鳥氏の談

能楽の興行法には種々の欠陥があつた、それが能楽の普及を妨げた最大原因といはなければならぬ、然し世間には實際能を見たがつてゐる人、見せてあげたい人、見せねばならぬ人、さういふ人々でいまだ曾て能に接する機会を得ないで打過してゐる人が意外に多い。それは能楽道の上からはもちろん国民性のかん養とか民族意識とかいふ点から見てもまことに遺憾千萬な事である、興行法が既に大改革の要に迫られてゐる事は、し界の人々にも考へられてはゐるがこれは局外から起つてきびくしと新機運を作る外は無いとは予て考へてゐたところである、然るにその機は意外に早く熟し東京朝日が敢然これに當つたのは真に近來の痛快事である。なまじひにし界の事情に通じてゐる人が容易に思ひ切れないところを断然突破したのが痛快である。劇場演能問題といふ事が多年し界の懸案となつてゐるが社の新講堂で相当の舞台設備を施し、申分なく能が演ぜられる事を立證するといふ事も一新記録である。但しこれは金ピカの劇場などで能が演ぜられる前提だと思つては見當が違ふ事を一言加へて置きたい。

坂元雪鳥のコメントは、從來能楽は「伝統」的な「高級」な劇であるため「能舞台」以外では演じないという原則を

破ることになるが、「社の新講堂で相当の舞台設備を施し、申分なく能が演ぜられる」ので差し支えないとする。但し、これは「新講堂」が「金ピカの劇場」とは異なるとしており、「旧慣」を実質的に破ることに関する批判にはかなり氣を使っていると言つてよいだらう。

「東京朝日新聞」昭和二年六月十五日に「各流能楽大会」の見出しで詳細な予告番組を載せる。また「東京朝日新聞」昭和二年六月十七日にも「各流能楽大会 十八、十九両日 朝日講堂にて午後一時開演 会費 二円。三元（本社受付、わんや本支店、プレイガイド）主催 東京朝日新聞社」という広告を出している。この時点でまだ切符が売れ残っているための宣伝であつたらう。このように「前宣伝」を記事の形で何回も出して、いよいよ十八日の初日を迎える。「東京朝日新聞」昭和二年六月十九日朝刊十一面は「演者も観客も芸術に酔ふ 大成功の能楽大会 全ての難事を突破して」の見出しで、一日目の様子を伝える記事を載せる。これを引用すると、

本社主催各流能楽大会第一日は十八日午後一時から朝日講堂で開催、能楽界破天荒の計画として能楽界はもちろん一般世間に一大反響をもたらし観衆千余名、殊にその大部分が各階級を網羅して従来能楽に親しみ薄き人々をもつて占められた事は能楽普及の趣旨に対して予期以上の成功を収めたものであつた。

「高砂」の莊重な神舞、「七騎落」の情趣に富む場面、「葵上」のすごみな型はそれ／＼観衆をして厳しゆくな氣分を味到せしむるに十分であつたが同時に出演者側の意氣込みもスバラしいものであつた。

なほ能評家山崎樂堂氏は左の如き感想を寄せられた。

「かういふステージへ能舞台を作るのにいつも困る経験を持つてゐたのですが大変巧みに出来てゐるので喜ばしく感じました。多少音響上の調子をいふ人もあつた様ですが、あれ位に聞えれば上々としなければなりませんまい」

十九日は予報の通り羽衣（桜間金太郎氏）六地藏（狂言）望月（観世元滋氏）午後一時開演。切符は定席は全部売切れと

なる。各「階級」の人が「千余名」も観客として訪れたという書き方で、能楽の「普及」の成果を強調している。「切符は定席は全部売切れ」というかたちで、「補助席」は残っていることを匂わせる書き方であり、この記事も入場券を販売する意図があると言って良い。

この催しの終わった翌日の「東京朝日新聞」昭和二年六月二十日には、「予期以上の成功 能楽大会終る」の見出しで、<sup>①</sup>

本社主催能楽大会の第二日は十九日開催、観客には徳川家達公、松平頼寿伯、岩倉具徳男等を始め山形、千葉、静岡、大阪、その他地方よりの参観者も多数に上つて前日に劣らぬ盛況を呈した。桜間金太郎氏の「羽衣」藤江又喜氏の狂言「六地藏」観世元滋氏の「望月」は観衆にそれく多大の感興を与へ、かくて朝日講堂における第一回の能楽公開の記録的催しは予期以上の成功を収めて午後四時四十分終演した。

と、盛況に終わったことを述べる記事が載る。「一般への普及」を目的としているはずの催しだが、観客の代表に徳川家達など華族をあげ、「朝日講堂」での催しが高い「格」を持っていることを宣伝していると言える。

#### 四 まとめ

明治・大正までの催しは、「年会費」「升席」で、原則、商店や家族単位での購入だった。しかし「知識人階級」の人を対象とする場合、観客は「その人個人」の趣味で「観たいと思った時」にチケットを購入することになる。主催者は原則「一回限り」の「個人」を相手とするため、不特定多数の人が「観たい」と思う演目・人を選ばなければならない。また、従来の能楽堂では人数的に採算がとれないので、観客の多く入る「劇場」が必要だった。新聞社の大

講堂は「観衆千余名」もの大人数を收容することが可能だった。

これらの「知識人階級」の人々は新聞の購買層と重なっていた。このため、新聞社は「記事」として催しについて取り上げ、宣伝した。この企画は成功し、能楽の維持者は「知識人階級」に移ることとなる。能楽を「興行」としてみた場合、想定される観客は少数の大パトロンから多数の「個人」となる。能楽の愛好者は、基本的に謡曲の稽古をする人であったことから、教材にも工夫が凝らされ、家元の録音によるSPレコードが「稽古用」として発売され、それが「謡い方」の全国的な統一につながってゆく。

朝日新聞社の能は第一回の成功を受けて、第二回が計画される。不特定多数の「個人」が相手であるため、常に「話題性」が必要となる。このため、「夜能」で、しかもラジオの室内「中継」放送を行なうのだが、このことについては別稿を記したい。

# 注

- (1) 「能楽画報」第十九年三月号 能楽書院 大正十四年三月十日発行 裏表紙
- (2) 「能楽画報」第十九年七月号 能楽書院 大正十四年七月十日発行 裏表紙
- (3) 「能楽画報」第二十一年一月号 能楽書院 大正十五年一月十日発行 裏表紙
- (4) 『大正の能楽』 倉田喜弘編著 国立能楽堂調査養成課編集 日本芸術文化振興会 平成十年三月発行 三八一―三八七頁

- (5) 「東京朝日新聞」昭和二年五月二十一日 朝刊 七面
- (6) 「東京朝日新聞」昭和二年六月一日 朝刊 十一面

- (7) 「東京朝日新聞」 昭和二年六月十日 朝刊 十一面
- (8) 「東京朝日新聞」 昭和二年六月十五日 朝刊 十一面
- (9) 「東京朝日新聞」 昭和二年六月十七日 朝刊 十一面
- (10) 「東京朝日新聞」 昭和二年六月十九日 朝刊 十一面
- (11) 「東京朝日新聞」 昭和二年六月二十日 朝刊 七面

〔補記〕 本稿は平成十八年度科学研究費助成基盤研究（C）、平成十八年度日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金、嵯山女学園大学学園研究費助成（A）（C）、高橋信三記念放送文化振興基金、愛銀教育文化財団助成による成果の一部となります。貴重なご教示を頂きました、大倉流大鼓方寛鉦一先生、大阪大学教授天野文雄先生に心より感謝致します。